

浄土宗義の伝承——聖岡、聖聰が伝えた教え——

服部 淳一

法然が専修念仏の教えを説いてから約二百年を経過してから誕生したのが了譽聖岡である。更にその弟子聖聰へと教えが伝承され、独自の教学が展開されていく。法然から聖岡に至るその二百年の間に浄土宗は法然が望んだものとは異なり様々な変化を見せている。

浄土宗の教学の基本は二祖三代といわれ、法然・聖光・良忠が示された教えが基準となってきた。然しながら教学は二祖三代、伝法は聖岡の構成と二つの基本が出来てしまっている。そこに断絶は有るのか、無いのか。聖岡が膨大な著作に示された教学に対する評価も時代によって異なっている。この論では法然の説いた選択本願念仏の教えがどのような展開を経て聖岡・聖聰教学となったかを検証していきたい。

一、聖岡の教学の基本

(一)基礎宗学の学習

最初に聖岡の教学を考える上で、出家から修学の過程が大きな意味を持っている。常陸国久慈郡岩瀬に誕生した聖岡は、父の戦死により八歳の時、地元の瓜連常福寺の開山である浄土宗第六世了実の許で出家をする。そこで基本的知識と共に浄土宗義の基礎を学ぶ。

十四歳の時に了実の師である浄土宗第五世永慶蓮勝（菊名蓮勝寺開山）の許に預けられ、更に深く浄土宗義を学ぶ。続いて鎌倉蓮華寺（後の光明寺）第三世定慧に学ぶこととなる。定慧は浄土宗第四世良曉の弟子であり南都に遊学し戒学に精通していた。聖岡が訪ねた時は鎌倉を隠棲し、小田原浄蓮寺を開創し教えを説いていた。ここは桑原道場とも云われ多くの僧が集まっていた。そこで了実、蓮勝から学んだ宗学を検証し、さらに円頓戒について学びを深めていったのである。

その後、二十五歳から三十八歳までの間、下野、鹿島などの北関東から関西まで基礎仏教から他宗教学、他の思想に至るまで、浄土宗学の強化ともいえるべき修学を重ねていくのである。

この了実、蓮勝、定慧の三師から受け取った教えは、法然、聖光、良忠、良曉と伝えられた浄土宗義の総決算ともいえる。この聖岡が学び伝えられた教えと他宗他教への修学が後の「聖岡教学」と云われる体系へと導かれる。¹⁾

(二) 浄土宗の状況

「聖問教学」を生み出す因縁は二つの事が考えられる。一つは当時の浄土宗の状況である。法然の弟子、その弟子と伝承される教えが解釈によって純一では無くなっていた。法然には多くの弟子がおり、『私聚百因縁集』（八巻第六話）や『浄土法門源流章』（浄全十五巻）によれば、聖光の鎮西義、幸西の一念義、隆寛の長楽寺義、証空の西山義、長西に諸行本願義や常隨の源智、信空がおり、それぞれの門流で教義を立て競い合っていたことがある。

又三祖良忠の門流も滅後に良暁の白旗派、性心の藤田派、尊観の名越派、道光の三条派、然空の一条派、慈心の木幡派と六派に分かれている。

このように専修念仏の教えを基本としているが、浄土宗という教団が一つの教えを広宣していたわけではない。ここに教団としての弱点を見出すことができる。

(三) 他宗からの批判

この状況の中で他宗からの批判に晒されるのである。浄土宗への批判は、一つはその教えについて直接中国からの伝授が無いことであり、そのことから正式な系譜が示されていないことが非難されている。それは元久二年（一二〇五）の興福寺奏状に「新宗を立つる失」とあるのにはじまり、虎関師錬の『元亨釈書』における「扶庸宗・寓宗」の批判など浄土宗は独立宗と仏教界から認められずにいた。これらの環境から抜け出すための努力が重ねられるのである。

法然にとつては承安五年（一一七五）に善導の『観経疏』「一心専念の文」により専修念仏に帰したことにより、善導の教えを伝承したと確信しているのである。その教えは世親、曇鸞、道綽、善導と継承、醸成されてきている

ことはその著『選択集』に述べられている。しかしその批判は古来の形式に準ずることに依拠しているのである。それは法然当時からあり、南都北嶺による元久二年（一二〇五）の元久の法難、興福寺による建永二年（一二〇七）の建永の法難においても新宗建立への批判がなされていた。

二、法然浄土教の検証

法然の門下にとってこの批判に応える方法は「偏依善導」の教義を検証することにある。聖光、良忠と継承された浄土宗義も各師によって裏づけの教学が展開されている。その上に立って、聖岡、聖聰にとって宗祖法然の教えをどのように受け取っていたかを検証したい。

聖岡の著作に『一枚起請之註』があり、聖聰には『一枚起請見聞』がある。この二つを通してその受容を見ていきたい。⁽²⁾

法然門下にとってその教えを伝承展開していくためにそれぞれの研学背景に基づいて教学が成立する。二祖聖光は結帰一行三昧と聖浄兼学を示す。『末代念仏授手印』において

「釈して曰く、我が法然上人の言わく、善導の御疏を拝見するに、源空が目には、三心も五念も四修も皆ともに、南無阿弥陀仏と見ゆるなり」⁽³⁾

と師法然の教えを理解し、三心五念四修と言われる行相も念仏一行に収斂し帰納していくことを示している。『徹選択集』に

「単聖道門の人、単浄土門の人はこれを知るべからず。聖道浄土兼学の人、これを知るべし。この意を得てより、一切の大乗経を披き、一切の大乗論を見るに、随喜の涙禁じ難し。これすなわち聖教の源底なり。法門の奥蔵なり」⁽⁴⁾

と聖浄兼学を示し、その教学の背景を表している。此の目的は、

「この書を造るに二意有り。いわゆる、一には先師上人の広学博覧の智徳を顕さんが為なり。二には濁世末代の小智愚鈍の迷惑を救わんが為なり」⁽⁵⁾

と法然の説く専修念仏の教えの基盤としての大乗菩薩思想を示しているのである。

三相互忠については『報夢鈔』と呼ばれる大部の著作を著し、自流の正義を示している。良忠は当時の法然門下の流派が異説を説くのに対し、上洛して法然門弟を尋ねその遺文を収集し、九品寺流等に対して論陣を張っている。

三、一枚起請之註について

法然の『一枚起請文』の註釈書については先学の研究によって聖岡の『一枚起請之註』が最初の文献となっており、ことが明らかである。しかもその存在は龍哲の『一枚起請之註管解』の刊行により、『一枚起請之註』と聖聰の『一枚起請見聞』と共に世に出たと云っても差し支えないと思う⁽⁶⁾。

聖岡の『一枚起請之註』が世に出るまでは、一枚起請文に関する註書を見ることが出来ないのは法然の御遺訓であるという位置付けであったと思われる。

形式は「唐土わが朝に」より「只一向に念仏すべし」までであり、「証のために」から「源空 花押」までの記載はない。「唐土わが朝に」より「別の子細候らわず」までを初重、「但し三心四修」より「只一向に念仏すべし」までを二重としている。

『一枚起請之註』の内容を見ると、一枚起請文に対して聖岡教判を当てはめて解釈する形式になっている。聖岡はその目的として、

「私に曰く、当世一流の門人の中に、念仏の一行を修せざるの輩、一向専修の法門に於いて、種種の邪義を興す。是れ相伝の主旨に暗き故なり。誠に智恵光の尊師、末代の邪義を防がんが為なり。仰信すべし、仰信すべし」⁽⁷⁾

と、浄土宗を名乗る人々の中に「念仏の一行」を修さない、あるいは法然の教えに反する教えを説くことが多く見られることへの批判である。又聖岡の了実、蓮勝、定慧の三師から受けた「相伝の教え」への絶対的自信を表明しているものである。

『一枚起請之註』の構成は、冒頭には

「將に起請文を釈せんとするに、二門有るべし。一には施化利生門、此れは是れ解義の分なり。則ち因分可説と云う。二つには発迹入源門、此れは是れ仰信之分なり。則ち果分不可説と云うなり。初めに「唐我が朝」自り、「悟りて申す念仏にも非ず」と云うに至るまでは施化利生門なり。次に「只だ往生極楽」と云う自り「別の子細候らわず」と云うに至るまでは発迹入源門なり」⁽⁸⁾

とその教えに聖岡教判のキーワードである施化利生門、発迹入源門の二門が提示されている。

(一) 施化利生門の表現

以下「一枚起請文」の語句に従って註釈が行われている。施化利生門については法然が否定している教説に対し、「もろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず」「また学問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず」の対象として中国と日本の諸師に分け、中国の天台、淨影、嘉祥、日本の空也、恵心（源信）、禅林（永観）を挙げ、その差異を示している。

次に法然の『無量寿経釈』の「諸宗諸家に甚深理観の行あり」⁽⁹⁾について、法相宗、三論宗、華嚴宗、天台宗、真言宗を挙げて理観の法門とし「観念の念にも非ず」の対象としている。

また禅宗の「即心即仏一念不生」宗曉の『楽邦文類』の「一心に観念して総じて散心を損すれば」、王日休の「上根の器は参禅の外に毎日頃刻の暇を以て西方を修せよ」を挙げ「此の如く念の意を悟りて申す念仏にも非ず」としている。

なぜインドの思想についてこの範疇に入れないのかを

「学者に謬解無く、偏執無き故に天竺を挙げざる。一義に曰く則ち天竺の学者は弥陀の本願は観念にも非ず、悟の上の念仏にも非ず。無観の称名無悟の念仏にして往生の素懐遂げる。只往生極楽の為にすと之を分別す。

故に天竺を挙げざる」⁽¹⁰⁾

とインドに於いては観念の念仏は存在していないことを示す。

この施化利生門の表現は浄土教思想の中に表れている念仏思想や、他宗の教義の中に示される重要な理観を否定するために示している。特にこの表現を施化利生門にしているのは、前述の異流の念仏思想に対しての否定のためであり、いわゆる聖問教学の特色として指摘される「他の教えの表現を利用して自らの教えを表す」ものとは異なる

っている。ここでは法然が否定している教えも、法然の教説をより正しく導くための表現と捉えていると思われる。⁽¹¹⁾
 同じく施化利生門の表現とされる『一枚起請之註』の中「但し三心四修」乃至「思う内に籠り候なり」の註に
 「問う、此の文に付いて三心は行具か、機具かと云う尋ね之れ有り。三心四修決定して南無阿弥陀仏と云うは
 行具と聞こえたり如何⁽¹²⁾」
 という問いが示される。これは三心は行によって具足するという他義についての否定である。

『観経疏』散善義の下品上生に、

「造罪の人障り重く、加うるに死苦来逼を以てすれば、善人多経を説くといえども、滄受の心浮散す。心散ずるに由るが故に、罪を除くことやや軽し。また仏名はこれ一なり。すなわち能く散を撰して以て心を住めしむ。また教えて正念に名を称せしむ。心重きに由るが故に、すなわち能く罪を除くこと多劫なり⁽¹³⁾」とあり、

「滄受の心浮散す」る凡夫にとって経典に説く行によって滅罪の功德を得ることは出来ないことを示している。

聖阿は『伝通記釋鈔』卷四に

「本願の義には行前の三心と行具の三心と云う名目を立てて、行前の三心を正と為す。故に設け行無けれども三心と名づくべし⁽¹⁴⁾」

と三心が行具ではないことを示している。ここに正義を表すために邪義との比較をする方法を取っている。これは『皆決定』とは広本選択に定とは決定の義なり。謂く念仏は捨命已後、決定して極樂に往生す。余行は不定なり。已上

私に曰く、此の決定に付いて機法の決定有るべし。法の決定とは是名正定業と信ずるを云うなり。機の決定とは、捨命已後、決定往生極樂と思ひ定むるを云うなり⁽¹⁵⁾」

とここに決定に法と機を示す。「機の決定」では「捨命已後、決定往生極楽」と、他流で説くところの現世往生を否定している。これも施化利生門の表現となっている。

その理由として、

「若し行具ならば、犯惑、渡世、虚仮不実の称名は悉く往生すべからず。夫れ万法に亘つて虚実の二心有り。

今、善導大師の御意は、虚仮心を捨てて真実心を以て、念仏を行すれば往生を得。之を以て至誠心と名づくなり。故に行具に非ず。」

と「犯惑、渡世、虚仮不実の称名は悉く往生すべからず」として、ここでも他流の教義を否定し、三心具足の念仏を示している。この虚仮心の否定は善導の『観経疏』に

「至は真なり。誠は実なり。一切衆生の、身口意業に修する所の解行、必ずすべからく真実心の中に作すべきことを明さんと欲す。外、賢善精進の相を現じ、内、虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして、悪性侵め難く、事蛇蝎に同じきは、三業を起すといえども名づけて雑毒の善とし、また虚仮の行と名づく。真実の業とは名づけず。もしかくのごときの安心起行を作す者は、身心苦励して、日夜十二時、急に走り急に作すこと、頭然を灸うごとくなる者も、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に生まれんことを求めんと欲せば、これ必ず不可なり⁽¹⁶⁾」
とあるように、「善導大師の御意」として虚仮心による往生は否定しているものを指す。

(二) 発迹入源門の表現

聖罔はこの『一枚起請之註』の中で、施化利生門として否定した他義に続いて示される発迹入源門に当てはめてある表現を分別してみたい。

その中「只だ往生極楽」と云う自り「別の子細候らわず」と云うに至るまでは発迹入源門なり」と示される。この内容は目的と方法論である。目的は「極楽への往生」であり、その方法は「単信の大信」の称名であり、「別の子細候わず」に発迹入源門と指摘するとするところに本願の力用を示す。

『次に念仏を信ぜん人』より『一向に念仏すべし』と云うに至りては、果徳難思の発迹入源門なり」

ここで「此の条は浄土究竟の大事なり。能く能く心肝に収むべし。乃仏乃祖の本懐なり。是凡是聖の得度、只だ此の一事のみ、正しく是れ発迹入源門なり」と「一枚起請文」の肝心であることを示す。

しかも「智者」ではなく「一文不知の愚鈍の身」や「無智のともがら」であることが求められる。これは前段の「別の子細候わず」と同様の「果徳難思」を表すこととなる。

その機とは、

「此の機に於いては、一分の理をも会せざるなり。此の不理会の分際にして往生の一大事を遂げ、大菩提の直道に至り、此の如く行ずる者は是れ浄土の正機なり。投機なり。是に知りぬ、浄土の正機にして、浄土の学者と名づくなり。仍て一代を諳んずる学匠なり」

と浄土の正機は「一分の理をも会せざる」立場ながら、それは即ち「浄土の学者」であり「一代を諳んずる学匠なり」とまで言い切っている。阿弥陀仏の本願の果徳は、

「五逆十悪の機、善悪破戒の人、但だ一声称名を以て、報土得生を願ひ、出離生死の大事と為す。此の称名の外に奥深き事を存ぜば、二尊の憐れみを蒙らざる者なり。」⁽¹⁷⁾

と阿弥陀仏だけでなく釈尊の救いの目的を示している。

(三) 聖罔の領解

聖罔はこのように「一枚起請文」の内容を施化利生門と発迹入源門に分けて理解している。特に発迹入源門に関しては、前述のようにあくまで法然の教義を踏襲していることは間違いない。その中で「果徳難思」の表現が聖罔教学の特色となる。聖罔はこのような発迹入源門に表れる教義を顕彰するために、聖罔教判といわれる大系を組み立てるのである。それは果分不可説によつて表現される阿弥陀仏の本願の世界である。法然の教説はあくまで凡夫の往生を表現しているが、聖罔はさらに往生や極楽を仏の側から表そうとしている。それは称名念仏が易行であるが他の行に勝っていること「勝行」であることを体系づけている。

聖罔はその基本を西方浄土が第一義諦妙境界相であることに求めている。

これは『釈浄土二藏義』第三十卷に

「実義とは第一義諦妙境界相なり。第一義諦とは即ち是れ実相妙境界相は即ち是れ法身なり。法身と言わば即ち是れ平等なり。平等と言わば是れ無差別なり。無差別とは即ち是れ無相なり。無相にして相なるは即ち是れ自然虚無之身無極之体なり」⁽¹⁸⁾

と教門実義に分けた中、無相にして相なる浄土を第一義諦妙境界相と表す。これは同じく『釈浄土二藏義』に

「如来は不思議智乃至最上勝智と説き、論主は第一義諦妙境界相と判じ、玄忠は相好莊嚴即ち是れ法身と釈し、光明は浄土無生亦無別究竟解脱金剛身と述べたまえり」⁽¹⁹⁾

その系譜を世親、曇鸞、善導に求めている。

「極楽遠からずして、全く十萬億の西なり。弥陀外に非ずして全く一座無移の形なり。二十九種の莊嚴歴歴明明として而も一法句の理性に帰入し、一法句の理性妙妙寂寂として而も二十九種の莊嚴を開出す。則ち是れ全

波全水の如く、亦是れ全水全波の如し。広略相入事理一致なり⁽²⁰⁾

『往生論註』に説く広略相入がこの論理の中心となると考えられる。ここでは一法句を理性とし表現された莊嚴を事相とする。この一致によって実義と教相の論理が成立する。

法然は指方立相に基き、有相の浄土、報身仏を説くのであって、法性の表現はしていない。その指方立相を対外的に認証させるために無相の原理を示そうとしたと考えられる⁽²¹⁾。

四、『一枚起請見聞』について

聖聰は『一枚起請見聞』において四つに分け、聖問の分別とは違って内容の解釈を試みている。全体を四つに分け、

一、諸師の説の否定 「唐土」から「念仏にもあらず」まで、従来の観念と学問の否定

二、安心の説示 「只往生極楽」から「籠り候なり」まで、安心の勧めと功德

三、起請文 「このほかに」から「本願にもれ候べし」まで

四、学徒への遺誠 「念仏を信ぜん人」から「ただ一向に念仏すべし」まで

と示している。聖問と異なるのは起請と遺誠を分けていることである⁽²²⁾。

「但だ往生極楽の為には」ところで、往生について無生而生、現世証得、見生無生を示している。言うまでもなく、師である聖問の教義に示されるものである。

無生而生については曇鸞が『往生論註』に

「彼の浄土は是れ阿弥陀如来の清浄本願無生の生なり。三有虚妄の生の如きには非ずということを明かす。何を以てか是れを言う。夫れ法性清浄にして畢竟無生なり」⁽²³⁾

と浄土往生のことを無生と表している。これを受け聖岡は『釈浄土二藏義』に、

「無生の人は無生の解を以て、而も往生を得る。此れ即ち無生而生の義なり。見生の人は見生の心を以て而も往生を得る。此れ即ち生即無生の義なり」⁽²⁴⁾

と無生而生、生即無生を表している。これについて聖聰は、『大原談義問書抄見聞』に、「無生而生の往生とは無生なり。生じ生ずれども不往生なり。来り来れども不來迎なり。此の無生無去の義は涅槃の証理なり。此の機は現世に無生而生の理を觀じて往生を願うなり。実にこの機に約するに往生は全く無生なり」⁽²⁵⁾と現世往生を可能とする機を示している。

見生往生について聖聰は『往生論註記見聞』第二に

「問う浄土の修行は四門の中には何れか、答う常途の四門は自力門の故に当宗の所存には之を配当し難し。但し是れ宗に二途有り。一には見生往生の機、二には無生而生の機。見生の機は有相なり。但し機見は有相なりと雖も、仏密意の所興は不思議本願が故に、有相の修因より無相の樂果に入る。謂く所行の法体には有相無相事理縦横の巧、これ有り。偏有偏無に非ず。故に之を分け難きと雖も、機見の前には但著有相なり。但し此の機も終に見生の火自然に滅すなり。委しくは今の註の如し。又無生而生の機、無相に歸して有相の浄土に生まる。是れ又今の註の如し」⁽²⁶⁾

と二種の機を示し、共に有相の浄土への往生であることを明らかにしている。この四門は智顛が『四教義』に説く

「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」⁽²⁷⁾のことであり、他宗の教義を利用して自説を説く、いわゆる施化利生門の説き方となっている。この見生往生については、既に聖岡が『教相十八通』に

「何に況や弥陀の教門は即相無相にして見生無生なり。仏意の構え出させる所、搜玄即冥なり」⁽²⁸⁾

と示している。この搜玄即冥の表現については懐感の『釈淨土群疑論』に示されるが、良忠の『安樂集私記』にこれを解して、

「感師の云く応に異質成ると雖も玄を搜るに即冥なりと言ふべし」⁽²⁹⁾

と淨土の淨穢についてその差はなく一如であることを示すためにこの語が使われている。

聖聰は『大経直談要註記』に「淨穢所異なると雖も、二土互相に見る。生仏位別にして、一如互いに交通し、穢界に在りて淨利を見る。凡見を以て聖境を觀る。斯れ則ち淨穢二土搜玄即冥の一理に由る。亦則ち無塵法界凡聖齊円の義に由るなり。体に付き、用に付き如来密意の力に非ざるは無し」⁽³⁰⁾と「淨穢二土搜玄即冥」と「無塵法界凡聖齊円」を同義として「如来密意力」によって成り立っていることを示す。「無塵法界凡聖齊円」に関しては善導の「真如広大にして、五乗もその辺を測らず。法性深高にして、十聖もその際を窮むること莫し。真如の体量と量性とは、蠢蠢の心を出でず。法性の無辺と辺体とは、すなわち元より来た不動なり。無塵の法界は、凡聖齊しく円かに、両垢の如如は、すなわち普く含識を該ねたり。恒沙の功德、寂用湛然なり」⁽³¹⁾と説かれているものを指す。このように仏のみが知ることのできる世界を重ねて示している。

その教えの系譜は聖岡が

「其れを玄忠自ら会したまえり。下品の人は実生を願求するといえども、見生の願心強くして已に往生を得れば、無生の界なるが故に見生の火自然に滅する時、無生の智水に混同するなり。故に是れも終には不増不減の

理に合会するなり」⁽³²⁾

と曇鸞の『往生論註』を解釈し、下品の往生にある。さらには『大原談義聞書抄』により、

「昔日我が高祖上人大原に在て法語に云く 人をして欣慕せしむるの教門は、且く浅近なるに似たれども、自

然悟道の密意は窮めて是れ深奥なり」⁽³³⁾

とその教義は「自然悟道の密意」によって成立していることを既に示している。その往生は『釈浄土二藏義』に、

「往生の見を改めずして当体即ち無生なり」⁽³⁴⁾と無生而生と見生往生と原理的に同一のものであることが明確にされている。

このように聖聰によって示された見生往生と無生而生の機の往生については以上のように聖岡の教判に基づいていることは間違いない。

しかし聖聰独自の展開は玉山成元氏が、

「聖聰がこの見聞を著した理由を「ここに聖岡のときは一步進んだ点を見い出さねばならない。いやそう主張せざるをえない立場にあったのであろう。こうして確たる証拠をつきつたうえで、だから一向に念仏せよ、

というのが聖聰の主張である」⁽³⁵⁾

と指摘するように、対外的に合わせ整理し説明を加えている。

五、仏意の論理

聖岡は『教相十八通』に

「今法王大法自然、而も生ぜん信に、是れ見生無生の教門、超世別願の規模なり。但欣慕だにもアラバ実相般若の爲にもアレ、濟度衆生の爲にもアレ、無余沉寂の爲にもアレ、姪房酒肆の爲にもアレ、等しく往生し同じく成仏すべし。故に高祖上人云く「人をして欣慕せしむるの教門、且く浅近なるに似たれども、自然悟道の密意は極めて是れ深奥なり」⁽³⁷⁾

と法然の言葉を用いて自然悟道の願力を表している。この言葉は何度も引用され、この見生無生の論理の基底となっているのが「自然悟道の密意」である。⁽³⁸⁾ この密意については聖岡・聖聰を通じて仏意として論じられている。

『釈浄土二藏義』に、

「相頓は仏意の一乗なるが故に、解会を待たずして、自爾も如なり。機乗の一乗は調機を帯びるが故に格を超えず。仏意の一乗は弘願を開く故に超にして而も亦超なり」⁽³⁹⁾

と浄土宗は相頓であるから仏意の一乗であると示している。この相頓は聖岡の二藏二教二頓の教判の終着点であり、『教相十八通』には二十三か所にわたり使用されている。これを検索すると本意、密意、願意も仏意と同様の使用形態であることが判る。この語句について第一は經典に説かれた意味での積尊の心、第二は一般的な意味での阿弥陀仏の心、第三に阿弥陀仏に深意が存在しているの三つに分けることが出来る。この「阿弥陀仏に深意が存在している」の密意は特に聖岡が自身の教義を強調したい時に使用している。

「凡そこれ則ち極仏の内証弥陀の密意なり。如来名号所具の五智を開いて此れを説きて仏智と名づく。論主願往生の信を積すとして如実修行と号し、玄忠は之を判じて実相身と云い、光明は之を挙げて仏密意と云う。高祖大師は此の義を講じて他力の実体と立す。此れ則ち弘願本拠浄土の秘蘊なり」⁽⁴⁰⁾

と、法然の言葉を

「他力本願の実体は謂く仏密意なり」⁽⁴¹⁾

と『大原談義聞書抄』より引用しているが、その論拠を以下の世親の往生論『往生論』の

「云何が作願する、心に常に作願し、一心に専ら畢竟じて安楽国に生ぜえんと念ず。如実に奢摩他を修行せんと欲するが故に」⁽⁴²⁾

曇鸞の『往生論註』の

「云何なるをか如実に修行せずして名義と相応せずと為する。謂く如来は是れ実相身是れ為物身と知らざればなり」⁽⁴³⁾

善導の『観経疏』の

「また仏の密意弘深なり、教門曉らめ難し。三賢十聖も、測つて闕う所にあらず」⁽⁴⁴⁾

に求めている。

法然はこれを受け

「法爾の道理ということあり。炎は空に上り、水は下りさまに流る。菓子の中に、酔き物有り、甘き物有り。これらは皆、法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもって罪惡の衆生を導かんと誓い給いたれば、ただ一向に念仏だにも申せば、仏の来迎は法爾の道理にて疑い無し」⁽⁴⁵⁾

と衆生の極樂往生は法爾の道理と明言している。

六、宗義の伝承

このように法然から二百年経過した時点においてその教えは論証、説明が次第に加わり当初とは異なった展開になっていることが判る。そこには決して変化しない基本と、加わった説明等に分かれる。ではどの様に展開したのか振り返ってみる。

「一枚起請文」では「ただ往生極樂のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく、往生するぞと思いとりて申す外には別の子細候わず」と「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」とある専修念仏を明確にするため、その他の教えの否定を展開している。

この法然の教えを内外的に論証するために、その弟子聖光以降の伝授者は経論を駆使して理論構成を積み重ねることとなる。そこには「一枚起請文」に示されている法然にとつての邪義が存在していることにある。これに対してその論拠を求める先はやはり善導の論書であった。

そこには、

「また仏の密意弘深なり、教門曉め難し。三賢十聖も、測つて闕う所にあらず⁴⁶」

とする阿弥陀仏のみが知ることが出来る本願力の絶対性の強調である。「別の子細候わず」とする論拠もこの「仏密意」によるものであることを展開する。これは衆生救済の教えを知識など条件付きでなく、「一枚起請文」の基

本姿勢を「仏密意」として内外の異論に対応したものと考えられる。

このように「一枚起請文」に関する聖岡、聖聰の理解を示してきた。この理解には基礎となる宗義の伝承が有って成立すると考えられる。既に『教相十八通』に示されている教えが聖岡・聖聰の基本にあることは述べてある。これは聖岡が師である了実、蓮勝、定慧等によって伝授された浄土教義を善導教学等によって再構築されたものと考えられる。⁽⁴⁷⁾

註

- (1) 拙書『聖岡上人一織月の教え』参照
- (2) 『一枚起請之註』については小川竜彦氏『一枚起請文原本の研究』（国書刊行会刊）藤堂恭俊氏「一枚起請文註釈書目録の制作と撰者考」（仏教文化十六号）安達俊英氏「法然『一枚起請文』の文献的性格（佛敎大学総合研究所紀要一号）加藤良全氏『一枚起請文』註釈書の系統分類について」（佛敎大学佛敎学会紀要 藤本浄彦教授古稀記念号）の論考がある。
- (3) 浄土宗聖典六卷二四〇頁
- (4) 浄土宗聖典三卷二七〇頁
- (5) 浄土宗聖典三卷二八三頁
- (6) 玉山成元氏『一枚起請見聞』一卷『聖聰上人典籍研究』（大本山増上寺刊）
- (7) 浄土宗全書九卷四頁
- (8) 浄土宗全書九卷三頁
- (9) 浄土宗全書九卷三三四頁
- (10) 浄土宗全書九卷三頁

- (11) 勝崎裕之氏「聖岡『教相十八通』における良忠説示の受容と展開」(仏教文化 六十三号)に聖岡の施化利生門と発迹入源門使用について述べている。
- (12) 浄土宗全書九卷四頁
- (13) 浄土宗聖典二卷三一四頁
- (14) 浄全三卷一一九頁
- (15) 浄土宗全書九卷四頁
- (16) 浄土宗聖典二卷二二八頁
- (17) 『一枚起請之註』浄土宗全書九卷五頁
- (18) 浄全十二卷三四六頁
- (19) 浄全十二卷三四八頁
- (20) 浄全十二卷三四七頁
- (21) 深谷慈孝氏「了譽聖岡の浄土教思想」(日本佛教学会年報四二号)に「聖岡が教門と実義を立てて浄土宗を顕彰した功績はすこぶる大である。ただ教門、実義の言葉およびその構想は聖岡の新説であるけれども、その基は曇鸞、道綽、善導等の所説の中にみられ、また実はこれらの人師の創唱でもなくして、すでに『無量寿経』に明らかに説かれているところである」と評価している。
- (22) 『一枚起請見聞』は浄全九卷七頁より十二頁
- (23) 浄全一卷二四五頁
- (24) 浄全十二卷三四六頁
- (25) 浄全十四卷七八四頁
- (26) 浄全一卷三五四頁
- (27) 正蔵四十六卷七二九 a

- (28) 浄全十二卷七五七頁
- (29) 浄全一卷七二一頁
- (30) 浄全十三卷二九六頁
- (31) 浄土宗聖典二卷一六一頁
- (32) 浄全十二卷七六七頁
- (33) 浄全十四卷七五九頁
- (34) 浄全十二卷三四七頁
- (35) 玉山成元氏『一枚起請見聞』一卷『聖聡上人典籍研究』(大本山増上寺刊)
- (36) 浄全十二卷七三九頁
- (37) 浄全十二卷三四二頁
- (38) 仏意・仏密意については拙稿「聖罔教学における仏意」(佛教論叢三十三号)「浄土教における仏意の一考察」(印仏研究七十八号)参照
- (39) 浄全十二卷三四七頁
- (40) 浄全十二卷三四七頁
- (41) 浄全十四卷七六二頁
- (42) 浄全一卷二三八頁
- (43) 浄土宗聖典一卷三六二頁
- (44) 浄土宗聖典二卷一六一頁
- (45) 浄土宗聖典六卷二七九頁
- (46) 浄土宗聖典二卷一六一頁
- (47) 聖罔聖聡教学についての論考には佐伯憲洋氏「『大原談義聞書鈔』における「無塵法界凡聖齊円理」の解釈につ

いて——西誉聖聡に着目して——」(印佛研究 六十七号) 東海林良昌氏「聖岡における法然の位置」(佛教文化六十三号) がある。

キーワード 聖岡、聖聰、法然、一枚起請文